

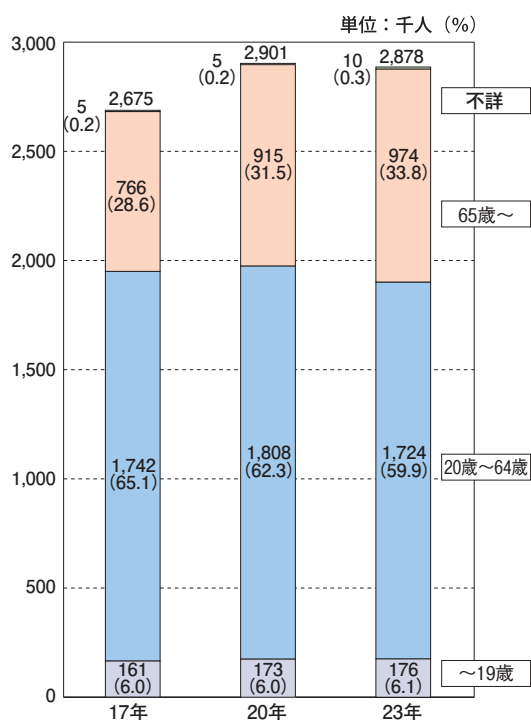
は、健康面での問題を抱えている者が多い状況を伺わせる。

（3）精神障害者

外来の精神障害者287.8万人の年齢階層別の内訳を見ると、20歳未満17.6万人（6.1%）、20歳以上65歳未満172.4万人（59.9%）、65歳以上97.4万人（33.8%）となっている。調査時点の平成23年の高齢化率23.3%に比べ、高い水準となっている。

65歳以上の割合の推移を見ると、平成17年から平成23年までの6年間で、65歳以上の割合は28.6%から33.8%へと上昇している。

■ 図表1-5 年齢階層別障害者数の推移
（精神障害者・外来）



資料：厚生労働省「患者調査」より厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部で作成

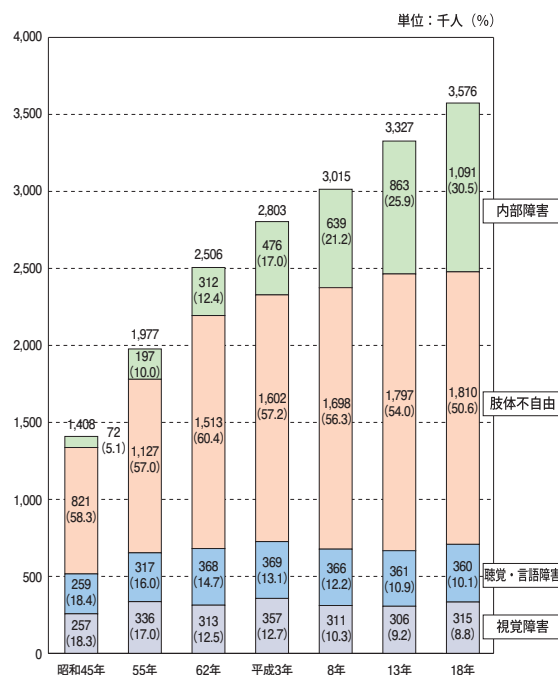
3. 障害種類別の障害者数

（1）身体障害者

在宅の身体障害者の障害種類別の内訳を見ると、視覚障害31.5万人（8.8%）、聴覚・言語障害36.0万人（10.1%）、肢体不自由181万人（50.6%）、内部障害109.1万人（30.5%）となっている。

障害種類別の年次推移を見ると、視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由はほぼ横ばいであり、内部障害の増加率が高い。平成8年から18年までの10年間の推移を見ても、内部障害の占める割合は21.2%から30.5%へと増加している。このことは、障害の発生原因や発生年齢とも関係しており、人口の高齢化の影響が内部障害の増加に影響を及ぼしているといえる。

■ 図表1-6 種類別障害者数の推移
（身体障害児・者・在宅）



注：昭和55年は身体障害児（0～17歳）に係る調査を行っていない。

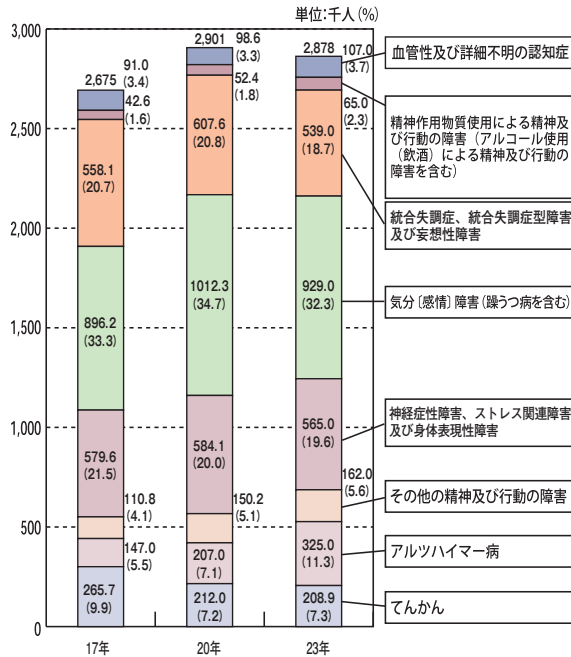
資料：厚生労働省「身体障害児・者実態調査」

（2）精神障害者

外来の精神障害者の疾病別の内訳を見ると、「気分（感情）障害（躁うつ病を含む）」92.9万人（32.3%）、「統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害」53.9万人（18.7%）、「神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害」56.5万人（19.6%）、「てんかん」20.9万人（7.3%）、等となっている。

平成17年度からの6年間の外来患者数の傾向を疾患別に見ると、アルツハイマー病は2倍以上の伸びを示している。

■ 図表1-7 種類別障害者数の推移（精神障害者・外来）

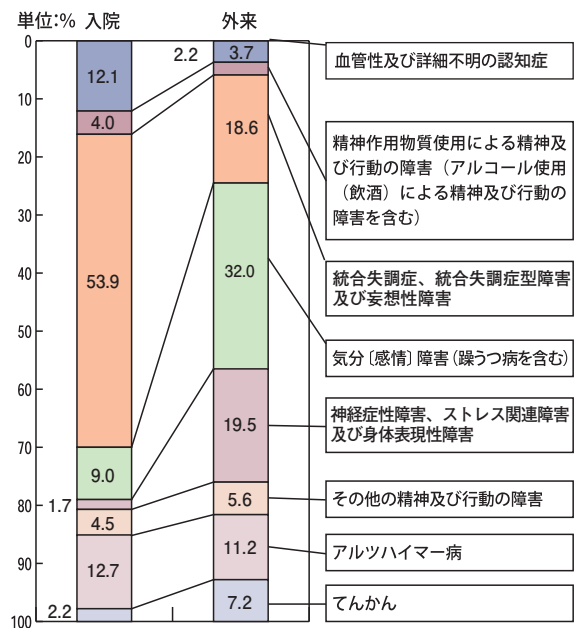


注：疾患名については調査時点のものである。
資料：厚生労働省「患者調査」より厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部で作成

（3）精神障害者の入院・外来の構成割合

精神疾患の疾患別に入院・外来の構成割合を見ると、入院では「統合失調症、統合失調症型障害及び妄想性障害」が半数以上を占めているのに対し、外来では「気分（感情）障害（躁うつ病を含む）」や「神経症性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害」の割合が高くなっている。

■ 図表1-8 精神障害者の疾患別構成割合



資料：厚生労働省「患者調査」（平成23年）より
厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部で作成

4. 障害の発生年齢及び原因

（1）身体障害の発生時の年齢

在宅の身体障害者（18歳以上）について、障害の発生時の年齢分布を見ると、40歳代以降の発生が6割強を占めており、65歳以上の発生に限っても24%程度ある。

障害種類別で見ると、視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由ともに3割から4割程度が40歳までに生じているのに対し、内部障害では40歳以前の発生は13%程度に過ぎず、大半が40歳以上で生じている。これは、内部障害では中高齢期に生じた心臓や腎臓等の臓器の疾病に起因する障害が多いことによる。